

第 章

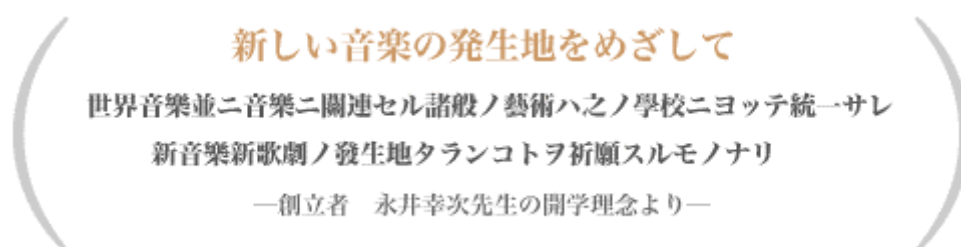
短期大学部専攻科の
理念・目的と個性・特色

第 章 短期大学部専攻科の理念・目的と個性・特色

1. 大阪音楽大学短期大学部専攻科の設立と本学の歴史

1915年（大正4年）10月5日、初代校長 永井幸次により、大阪市南区塩町（現、中央区南船場）に私立大阪音楽学校（旧称）は設立された。その後、1926（大正15年）には大阪市東区味原町（現、天王寺区味原本町）に移転、1948年（昭和23年）には大阪音楽高等学校、1951年（昭和26年）に大阪音楽短期大学が開校された。1954年（昭和29年）に、豊能郡庄内町野田（現、豊中市庄内幸町）に移転し現校地となっている。1958年（昭和33年）には大阪音楽大学が開校され、同時に大阪音楽高等学校が附属音楽高等学校へと改称された。また、翌年の1959年（昭和34年）には大阪音楽短期大学を大阪音楽大学短期大学部へと改称された（1992年には大阪音楽大学短期大学と改称）。附属音楽高等学校は1981年に閉校となったが、1967年（昭和42年）には附属音楽幼稚園、短大専攻科（1995～1999年はセミナー制）、1968年（昭和43年）には大学院音楽研究科の開設を経て、現在の教育組織体制へと発展してきた。大阪音楽大学短期大学部専攻科（以下、本文中では短大専攻科と略す）として現在の実技を主体とする教育体制が確立したのは2000年からであり、同年には短大専攻科の作曲専攻・声楽専攻・器楽専攻が学位授与機構の認定を受けた。

以下に本学法人が設置するすべての教育機関が共有する建学の精神・理念を示す。この精神・理念は各教育機関が示す目的・目標の基本理念となっている。



2. 大阪音楽大学短期大学部専攻科の理念・目的

[現状の説明]

「新しい音楽の発生地（発信地）」になるべく、建学の精神の自己形成を伴った「修練・研究・創造」の場であることが重視され、教育課程において脈々と生きている。大阪音楽大学短期大学部専攻科規則 第2条（目的）においては、専攻科は、短期大学の基礎の上にさらに深く、音楽に関する事項を教授し、その研究を指導することを目的とすると記されており、短大卒業後さらに1年間専門実技の研鑽・追求を目標に専門分野の学習を深めると共に、専門外分野の科目も履修でき、幅のある人間形成を目指している。

[自己点検・評価及び長所と問題点]

短大専攻科の理念・目的は、学内及び受験生に対して発行されている大学案内において、本学の歴史と共に記載されている。また入学式・卒業式には学長・理事長が必ず「建学の精神・教育方針」について言及している。

[将来の改善・改革に向けた方策]

「新しい音楽の発生地（発信地）」としての責務を果たす為、教育理念・目的がカリキュラムや授業内容に徹底されなければならない。その為に、学生及び教職員に「建学の精神」の重要性を再認識し、それに基づく教育理念の具現化に努める必要がある。

3. 本学の個性と特色

短大専攻科では短期大学の基礎の上にさらに深く音楽の学修を深めるとともに、作曲専攻、声楽専攻、器楽専攻の全専攻が大学評価・学位授与機構による認定を受けており、短大卒業後短大専攻科において所定の単位を履修し、残りの必要単位を補った上で同機構の審査に合格すると、「芸術学学士」が取得できるのも短大専攻科の大きな特色である。

4. 科目・専攻の理念・目的・教育目標

[現状の説明]

短大専攻科には作曲専攻・声楽専攻・器楽専攻の3専攻がある。それぞれ短大卒業後1カ年の課程であり、専門実技の研鑽・追求の目標が達成出来るように、多くの機会を与えている。各種演奏会(ミレニアム・スチューデント・コンサート 2003・2004、ジュニア・カレッジ・アンサンブル・コンサート、ジュニア・カレッジ・ソロ・コンサート、新作展)のオーディションへの参加、コンサート・プロデュース、修了研究などがあり本人の意思次第でその専門実技の研鑽・練磨には充分な体制が準備されている。以下に各専攻における教育目的・目標を示す。

『作曲専攻』

作曲実技の研鑽を柱とし、作品分析を通じて楽曲の構成原理や音楽活動におけるコンピューターの利用法、デスクトップ・ミュージック(DTM)に対応した編曲法などを選択して学修することで、基礎の伸長と応用力の伸長を目標とする。

『声楽専攻』

「声楽」

短期大学で得た声楽技術を基礎とし、短大専攻科では個々の進捗状況と適性に応じ、個人レッスンという形態の中で、より柔軟で音楽性豊かな歌唱表現を追求することを目標とする。

「ミュージカル」

「ミュージカル実技」を核として、卒業後の舞台活動に通じる高レベルの授業を展開すると共に、より多くの知識、理解力、感性を身につけるための人間教育を主眼とする。

「ポピュラー・ヴォーカル」

卒業後ポピュラー音楽産業に従事することを前提に、歌唱力の向上と歌唱法発展、フレージング、フェイク、ヘッド・アレンジ、ポピュラー音楽用語、ポピュラー音楽史など、ポピュラー音楽に関する知識の修得を目標とする。

『器楽専攻』

「ピアノ・クラシック」

専門実技の研鑽に主体を置き、演奏技術の向上、表現力の向上を目指す。また、アンサンブルに取り組むことも可能で、幅広くピアノ演奏を研究することを目標とする。

「ピアノ・ポピュラー」

ポピュラーピアノの専門実技練達に主を置き、あらゆるシーンや幅広い奏法に対応できることを目標とする。個々の学生の方向性に応じたジャンルをより専門的に追及し、レパートリーの拡大を図る。

「電子オルガン」

短期大学で学んだ理論と実践をさらに深く追求した内容のレッスンをを行い、優れた編曲や完成度の高い演奏テクニックの修得を目標とする。将来、指導者を希望するものに対しては必要な項目の指導、実習も出来る。

「管・弦・打楽器」

短期大学で修得した専門実技のさらなる研鑽を目指す。個々の進度に応じた個人レッスンで演奏技術の向上、表現力の向上を図り、音楽家としての資質を高める指導を行なう。

「ジャズ」

学生の学習目的により、ジャズ音楽の研究や演奏技術の向上を目指し、同時に将来音楽産業等に従事できるよう、高い知識、能力を身につけることを目標とする。

「箏」(2005年4月から器楽専攻「邦楽」に名称変更)

古典曲、新曲を通じて必要な知識と演奏技術、箏歌のあり方など、個性を生かしつつ専門的に指導を行なう。

本教育課程では、必修の実技に加え選択の実技科目を設定し、さらに学生自身の学習計画に応え専門外分野の履修も可能なカリキュラムを編成している(詳細はカリキュラムの項目を参照)。それに伴い、毎月1回定期的に開かれる「短期大学部専攻科運営委員会」において、学生の履修状況、選択科目履修者数等の調査結果を常時把握し検討を行っている。

[自己点検・評価及び長所と問題点]

教育目的・目標は、寄附行為、学則、大学案内、本学ホームページ等にその内容が記されており、入学時に開かれるガイダンスの際に細かく説明されている。教育目標の達成度は、毎回の各オーディションにおいて短大専攻科の学生が必ず受験しており、合格者も出ていることによって示される。図表1に、短大専攻科の学生による演奏会出演の為のオーディション受験状況を示す。

図表1 短大専攻科におけるオーディション受験者・合格者数(2001～2004年度)

年度	2001				2002				2003				2004								
	受験者数		合格者数		受験者数		合格者数		受験者数		合格者数		受験者数		合格者数						
専攻	P	V	P	V	P	V	P	V	P	V	O	P	V	O	P	V	O				
ジュニア・カレッジ・ソロ・コンサート	3	3	1	2	8	7	3	1	2	8	0	0	1	0	2	1	4	0	0	0	
ジュニア・カレッジ・アンサンブル・コンサート	2	0	0	0	3	1	2	1	1	2	1	1	2	0	1	0	1	0	0	1	
ミレニアム・スチューデント・コンサート(前期)	未実施				未実施				未実施				0	0	0	0	0	0	0		
ミレニアム・スチューデント・コンサート(後期)	未実施				未実施				0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
新作品展	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	

P: 器楽専攻(ピアノ・クラシック及びポピュラー) V: 声楽専攻、O: 器楽専攻(Pを除く)

[将来の改善・改革に向けた方策]

短大専攻科では、教育目標の達成の為に各種オーディション、コンサート・プロデュース、修了研究と多くの演奏機会が用意されている。これらのことから、実技面において特に改善・改革の必要はないと考えられる。

5. 教育目的・目標の全学的共有化とその為の施策

「大阪音楽大学短期大学部専攻科規則 第2条」により「専攻科は、短期大学の基礎の上にさらに深く、音楽に関する事項を教授し、その研究を指導することを目的とする。」ことを、本組織における最も大きな教育目的・目標として定められている。また、これに基づき、上記した専攻科ごとの教育目的・目標が定められている。

[現状の説明]

教育目的・目標を伝える手段として毎年7月初旬に発行される入試要項、4月発行の短期大学専攻科学生便覧、月発行の大学案内、年間9回発行の広報「Muse」(ミューズ)

がある。また、ホームページにおいてもその内容を見ることができる。

[自己点検・評価及び長所と問題点]

上記発行の案内物は、在校生や新入生に教育目的・目標を伝えるため、数、方法、内容に問題ないと思われる。入試要項は受験生全員に、学生便覧及び大学案内は新入生全員に配布されている。また広報 Muse はいつでも誰でも受け取れるようになっている。

[将来の改善・改革に向けた方策]

各冊子内容については別項にて示すが、現時点において便覧や連絡が少ないということはない。

6. 教育目的・目標の具現化に向けた施策

[現状の説明]

毎年 11 月に短大専攻科に在籍する学生達に対し、短大専攻科の組織体制や授業内容についてのアンケートを実施し、学生側からの意見を取り入れる努力を行なっている。

アンケート結果は短期大学部専攻科運営委員会に取り上げられ審議される。特に希望の多い事項については授業内容、担当教員、曜日、時限、選択人数、コマ数など実行可能かどうかの審議を行い、9 月までに審議決定された事項は翌月の短大運営会議にて審議される。さらに翌々月の短大教授会、理事会の承認を経て次年度より実施される。

[自己点検・評価及び長所と問題点]

本教育課程は 1 年であるため、アンケート結果に基づく改善・改革を回答した学生本人が受けれない。前年度に得られたアンケート結果から、次年度の学生にも適合する問題点や改革案を、審議段階で慎重に選択する必要がある。

[将来の改善・改革に向けた方策]

アンケートに回答した年度の学生に対して、問題点の改善・改革が少しでも実施できるように考えていかねばならない。それに伴い、次年度以降においても共通の問題点として考えられるかどうかの審議を慎重かつ迅速に行う体制作りが必要がある。

